Desperate Remedies：過去の謎解き

内　藤　歓　修

若き建築家トマス・ハーディは幼い頃からの文学に対する情熱を抑えがたく，建築の仕事の傍ら，読書に励み，詩や散文を書きためていた．建築の修業をロンドンでしていたが，都市生活にどうしても馴染めず，暫くの間帰郷した．この間処女作 *The Poor Man and the Lady* を書き，£20を負担するという条件の下に，出版社チャップマン(Chapman)とどうやら出版契約を結ぶことができた．だがチャップマンは出版を前に，ハーディの原稿を読んだジョージ・メレディス (George Meredith)と彼を会わせ，原稿についての批評や忠告を聞かせた．メレディスの意見は，何とかして文学で身を立てようと意気込んでいるハーディにとって大変苦いものであった．

> …he [Meredith], the speaker, strongly advised its author not to "nail his colours to the mast" so definitely in a first book, if he wished to do anything practical in literature ; for if he printed so pronounced a thing he would be attacked on all sides by the conventional reviewers, and his future injured[1].

このように「旗幟を鮮明」にしないで書き直すか，あるいは暫く脇に置いておいて，a novel with a purely artistic purpose, giving it a more complicated "plot"[2]を目指す方が良いというのが，メレディスの忠告であった．実際，この小説は中央と田園という２つの対照的体験を下敷きにして書かれ，その意図は社会改革にあり，貴族，ロンドンの社交界，中産階級の俗悪さ，近代キリスト教や社会のモラルなどが徹底的に攻撃されていて，社会主義的傾向の強い作品であったという[3]．

メレディスのこのような忠告を受けた後，"plot"はその後のハーディにとって暫くの間，強迫観念のようになったのである．その影響は，*The Poor Man and the Lady* の出版を諦め，新たに書き上げられた *Desperate Remedies* に強く見られる．これから文学の道に入ろうという，ドーセットの田舎の作家の卵は，当時文壇の大御所であったメレディスの助言に金縛りにあって，自分の本来書きたい社会改革的小説は書けなくなり，「より複雑なプロット」を持った，より複雑な謎を創作し，読者に好奇心やサスペンスを提供することを目的とした小説を書

くことに腐心する．新たな構想を求めて苦吟しているハーディの目に留まったのは，当時大評判になっていたウィルキー・コリンズ（Wilkie Collins）の *The Woman in White* であった．出版社が受け入れてくれる構想をここに求めて，研究し利用したらしい．数多くのハーディ研究でも，*Desperate Remedies* に対する *The Woman in White* の影響が追跡され指摘されている．

このような事情の下に書かれ，出版された，ハーディの事実上の処女作である *Desperate Remedies* は，1871年3月25日にティンズリー・ブラザーズ（Tinsley Brothers）社から匿名で出版された．原稿は最初マクミラン（Macmillan）社に送られたが余りにも sensational であるという理由で返送された．次に，当時 sensation novels の出版を数多く手掛けていたティンズリー・ブラザーズ社に送ったところ，多少の内容の変更をすることや，£75の出版保証金を払うことを条件として，出版を引き受けてくれた．幾多の苦労をし，譲歩を重ねて，やっと出版できた本作品には，ハーディが小説家としての出発点に立ち，創作の方法を模索した跡が明らかに残っている．

痕跡の明らかなものの1つは，この小説の特徴である扇情的雰囲気とゴシック趣味である．書簡を多数挿入したり，Manston の長文の遺書で終わるのは当時活躍し，大人気を博していたゴシック作家ウィルキー・コリンズの手法によく似ている．ここには，何とかして文壇に出たいハーディが，世間の注目を集めようと必死の努力をし，小説の技法を手探りで探していたことが伺われる．ハーディ自身，*Desperate Remedies* の1889年版に付した序文で「その構成上，守られた原則は，興味を喚起するために，確かに，余りにもミステリー，筋の紛糾，意外性，不道徳に比重がかかりすぎている」と反省しており，更にこの作品の不評を嘆きながらもその原因は「慰められるのはこの作品がジョージ・メレディスの忠告に余りにも文字通りに従ったため」とし，「この極めてセンセーショナルなプロットは（自分の）本来の傾向とは全く相反するやり方で無理に書き上げられた」と説明している．だが実際にはメロドラマ調で始まっているのが，後半で扇情主義的に変調しており，テーマは一貫していない．

Desperate Remedies の大きな欠点として挙げられるのは，テーマの一貫性に欠けるという指摘が一般的である．ゴシックロマン的性格を持つ，一種の際物としての側面を備え，テーマが一貫していないと指摘される本作品は，やはりハーディの代表作とは言い難い．また一般的には二流の作品として無視に近い扱いを受けているのも事実である．*The New Wessex Editions of the Novels of Thomas Hardy* の *Desperate Remedies* の編者 C. J. P. ビーティ（Beatty）もその序文でテーマの一貫性の欠如を認めている[4]．だが，こうした幾つかの欠点はあっても，ビーティは作品の初めの3分の2の部分は「恋愛の悲劇という真にハーディらしいテーマ」と「産業社会におけるダーウィン流の人間の窮状という問題」を「プロットのメロドラマ的条件の下に統一」することに成功しているし，後の3分の1は「厳密にウィルキー・コ

リンズばりの水準において」成功していると述べている.

メレディスに plot 最優先の筋道をつけられ，その plot も世間の耳目を引き付けるに足るものという強い強迫観念を持ったハーディは，自分の書きたいものと，書かなければならないものの板挟みとなり，「センセーショナル」で「因習的」で「メロドラマ的な」plot を考えだし，「場面」や「登場人物」には真実味を与えた物語を苦心の末創作したのである．真に書きたいものを，書かなければならない大衆受けのする扇情的筋に包み込んだものとも見られる．この作品は勿論，創作の技法模索の途に就いたばかりの，経験の浅い若書きのため，ややもすれば「扇情的」な側面に傾き勝ちで，読者にもその印象が強く感じられるが，一方では真のハーディ的特徴も現れており，後の重要な作品のテーマの萌芽を内包している．最後の作品 *Jude the Obscure* まで一貫して作者が抱き続け，更に発展させていったテーマや技法，また世界観，人生観の芽生えの幾つかがここに提示されている．農村や田園地帯，そこに住む人々の生活の描写や彼らの会話，人間観察の作者の鋭い目，詩や散文といった文学作品の引用や言及，作品の底に流れる悲劇的な基調低音などは，全てハーディの小説の特徴である．*Desperate Remedies* の出版当時に，痛烈な酷評を掲げたスペクテイター（Spectator）でも，リンゴ酒造りの場面などの田園風景を賞賛したくらい，ハーディの故郷の田舎やその住人たちに対する眼差しは暖かいものであった．

Desperate Remedies の主人公 Cytherea Graye は父を失い，町から田園地帯に生活を移すことになる．そして，その地で様々な謎に巻き込まれ，苦難に遭い，切り抜けて行くのである．父 Ambrose Graye の死が Cytherea と Owen の Graye 兄妹の苦難の直接の原因となっているが，遠因はそれから28年遡った1835年のクリスマスの季節の若い男女の出会いにあった．クライストミンスター（Christminster＝Oxford）の北部のホックブリッジ（Hocbridge）という田舎町で開業したての若い建築家 Ambrose は，ロンドンに住む友人を訪ね，クリスマス休暇を過ごす．そこで Bradleigh 退役海軍大佐の一家と知り合いとなり，一人娘の Cytherea Bradleigh の女王然とした気品に一目惚れしてしまう．Miss Bradleigh も彼の接近を喜んでいるらしかった．甘美な 3 週間の後，Ambrose は彼女に求婚するが，翌朝，As recognized lovers, something divides us eternally.（I-1）という謎めいた手紙を残し，一家は匆々に立ち去り，この出会いは理由のはっきりしない挿話として終わる．一見何でもないような挿話がこの物語を最後まで支配して行くし，Miss Bradleigh の手紙の中の‘something’が年を経て成長し登場人物の運命を左右することになるまで重大なものになる．またこれは謎として残り，この物語の筋を導く主要なミステリーとして読者に大きく提示される．Ambrose の友人の話だと Miss Bradleigh は以前将校である従兄と愛を誓った仲にあったが，彼がインドに赴任し，彼女も両親と旅行に出掛けたので，2 人は別れてしまったということである．その後，Miss Bradleigh の母がイングランド西部の莫大な財産と土地を相続してロンドンの家をたたんで

から，一家の消息は杳として知れない．こうして2人の結びつきは益々見込みのないものになった．

Ambrose Graye は8年後，財産もあり，才能にも恵まれた女性と結婚し平凡な生活を送る．やがて Owen と Cytherea が生まれるが，初恋の娘が忘れられず，失意の気持から立ち直れないまま，快活な性格であったのが憂鬱症に陥ってしまった．そして毎日を鬱々として暮らし，無理な借金を重ねて行った．1861年には妻が死亡し，1863年10月彼自身も建築中の教会の尖塔に組んだ足場から落ちて死亡する．Cytherea が18歳，兄 Owen が19歳の時であった．この事件が目撃された場面描写でハーディは後の作品にも現れる2つの特徴を示している．その1つは Cytherea の女性としての姿である．身のこなし方は大きな動作であろうと微細な動作であろうと，彼女のお手のものとなっていた．その弾力性や柔軟性は教え込まれたものではなく，自然に発達したものである．外面的な姿態の様子は彼女の内面的な特質を示唆する．彼女は「女性本能により，自分のこの点が外見上の最善の，かけがいのない特色であることが分かってくると，更に洗練されたものにするために，細部の仕上げに，実に細かい気を配った」(I-3)．このことは，Cytherea が Fancy や Bathsheba のような本能的媚態を持ち，努力することなしに，無意識に男性の心を惹きつけるものを備えていることを暗示している．また，これは最後の悲劇のヒロイン Tess にまで続く，ハーディの女主人公の大きな特質となっている．

Cytherea は父の死の現場を期せずして目撃してしまう．この場面の描き方はハーディの特徴的な描写法で，絵画的なものである．彼の小説の多くの場面に用いられており，読者の胸にも強い印象をもって刻み込まれているであろう場面，例えば，*Far From the Madding Crowd* に於ける瀕死の Fanny Robin が必死の思いで救貧院に辿り着こうと努力する哀切極まりない場面や，*The Return of the Native* のエグドンという土地のあたかも生き物のような雰囲気を描く印象的な導入部などは，映像的，また映画的技法とも言えるものである．カメラのレンズを通して見る世界は現実の世界から遊離し抽象化された存在となり，現実感を人の意識から奪うと言われる．例えば戦争報道写真家がカメラのファインダーを覗いた途端，眼前の世界が抽象化され，現実の危険が観念的なものになり，危険を危険と思わず，被写体に突進して行き，死の危険に会うことが屢々であるというが，映画的技法は現実を客体化し，現実から距離を置く作用を持つ．ハーディがこのような技法を多用するのは，彼の外界を見る態度，更には人生に対する態度と強く結び付いているに違いない．この物語の各章や細かい区分立ての出だしの部分の多くは実に素気ない描写となっている．「時計は12時を打った．オールドクリフ家の公式晩餐会は終わった．列席者は全部立ち去り，ミス・オールドクリフの呼び鈴がけたたましく鳴った」(V-3)．「時刻は午後4時．場所はナップウォーター館の女主人の書斎，即ち私室．人物は正式な喪服をまとったミス・オールドクリフで唯独り座っていた」(VII-1)．こ

のように，対象をありのままに余分な修飾語なしに説明し，作者の感想もなければ，感情移入もされていない．単に場面設定の指示をする芝居やドラマの卜書きによく似た客観的描写である．このような文章は演劇ではその観客に，小説では読者に，これから始まる物語の枠組みや場所の設定を示し，その枠や場所の内での事の展開を認識させ鑑賞させることを可能にする．私たち鑑賞をする者は自分の属する現実の世界と，演劇や小説という虚構の世界との間の距離や隔たりを感じ取り，枠組みの中の世界をはっきり認識することによって，私たちをこういう状況に置いた作者の存在を感知するのである．このような描写法は，その後のハーディの作品の中でよく使われるのだが，登場人物の目を通して見られた外界を提示するという状況で，悲劇的場面に利用されている．市役所の一部屋で上演されるシェイクスピアの朗読を聞きにやってきた，Cytherea が何気なく辺りを見回して目に留めたのは，窓から見える教会の尖塔で，仕事をしている父の姿であった．何か物思いに耽っているような父 Graye は，一瞬身体のバランスを崩して足場から落ちてしまう．読者はこの場面を Cytherea の目を通して目撃する．

She moved herself uneasily. 'I wish he would come down,' she whispered, still gazing at the sky-backed picture. 'It is so dangerous to be absent-minded up there.'

When she had done murmuring the words her father indecisively laid hold of one of the scaffold-poles, as if to test its strength, then let it go and stepped back. In stepping, his foot slipped. An instant of doubling forward and sideways, and he reeled off into the air, immediately disappearing downwards. (I-3)

この時，Cytherea が父の作業場面を眺めている様子を，ハーディは殊更にはっきりと述べている．

The picture thus presented to a spectator in the Town Hall was curious and striking. It was an illuminated miniature, framed in by the dark margin of the window, the keen-edged shadiness of which emphasized by contrast the softness of the objects enclosed. (I-3)

ここで読者は少々複雑な状況に立ち会う．黒い窓枠にはめ込まれた細密画のような印象的な光景と，その光景の中ですぐ後に起こる事件．それらを何気なく無頓着に見ている Cytherea を更に外部から見ている立場と，Cytherea の目を通してこれら全体の光景を目撃する立場という 2 つの立場に立っている自分に気付くのである．いずれの立場も Graye の死を抽象的

にしてしまう．この光景と Cytherea の姿の両方を同時に外から見る場合には，読者に傍観者的要素が加わらざるを得ないし，この「黒い窓枠にはめ込まれた細密画」に見えている光景は，Cytherea の瞳というレンズを通過して，窓枠と瞳といういわば2重のフィルタを通り抜けた結果，抽象的度合いをずっと高めているのである．今や Graye は地上に落下する1個の物体と化してしまった．細密画の中での「足が滑って…空中によろめき落ち，忽ち下方に姿を消した」(I-3) という，現実感の希薄な Graye の死を淡々と描いている作者の傍観者的態度は，読者に一種虚無的な感覚を抱かせ，更には Graye の死は，人間存在の不条理さと無価値性の強烈な印象を読者に与えるのに十分な効果を持っている．こうした人間と世界との関係を見る作者ハーディの見方は，この冷静な距離を置いた態度の中に現れている．全知的視点を保持した小説作法は，作者と作品世界との距離を堅持し，作者の思想の核心とも言える人間存在のアイロニーは，作者独特の対象との距離の取り方によって益々効果的に表現されるのである．物事を観察する際，あまりにも人間的側面に深入りし，はまり込んで，関係が濃密になるとアイロニーの入り込む隙間がなくなってしまう．そこで世俗的事象や登場人物などとの間に一種の緩衝地帯のような，対象を客観視できる余裕のある心理的空間をハーディは必要とする．一定の距離を保った高い位置から，彼は人間世間の虚栄，哀悲，喜劇や悲劇を眺め，鳥瞰的な視野を得る．そして客観的な立場の観察者としての視点を特定の人物の視点に付与し，物語の筋の進行に大きな役割を与えるのである．このような人物の中の1人に Cytherea がおり，後には Gabriel Oak，Diggory Venn，Elizabeth-Jane などが客観的で鳥瞰的な視点を持ち，物語の中で中心的な活躍をすることになる．

父 Graye の突然で，印象的な死去によって，Owen と Cytherea は世間の荒波の真っ直中に放り出される．兄19歳，妹18歳の若い兄妹に残されたのは莫大な負債と父の若い頃の恋愛事件の謎であった．この物語の中心部分は2人がその後1886年3月までの29カ月間に経験した事件である．父の死によって，27年の昔父に母とは別の恋人があり，ある事情で別れ，そのため父の生活がすさみ，その後大きな借金を作ってしまったことが発覚する．ここに作者は，父の恋人は誰か，そして何故別れたのかという主要なミステリーを読者に提示する．このように父の過去の恋人をめぐる一連の謎解きが，*Desperate Remedies* の主要な筋であるが，前半に謎の設定が行われ，後半が謎の解明という物語の構成となっている．兄妹は，かつて父を失意のどん底に陥れた謎の女性について話し合うが何の解決の糸口も見つけられないまま，これからの生活を維持して行くことに心を奪われる．これといった生活手段をもたない兄妹は冷淡で頼りにならない故郷を離れ，遠隔の地に職を求めることにする．Owen はバドマス・レジスで建築事務所を経営する Gradfield の下で臨時の下働きとしての職を得たので，Cytherea と共にホックブリッジを追われるようしてに後にする．Owen はなんとか建築事務所に勤務することができた．

そこの主任製図師 Edward Springrove について Owen が話題にすると，Cytherea は彼に津々たる興味を抱くようになる．Owen の話だと彼は農家の息子で年齢は25，6歳である．パブリックスクール出身ではないが，よく本を読んでおり，書物や芸術の価値判断にも鋭いところを示すようだ．一寸した詩人でもあり，雑誌の詩人欄に時折掲載された自作の詩を盛んに見せたがっている．彼は現状に飽き足らず，あと 2 週間したらロンドンに出て，一旗揚げる積もりだと話しているらしい．その後暫くして Cytherea は Edward と近づきになり数回バドマス湾でボート遊びをする仲になる．ロンドンに行く前に Cytherea を誘った最後のボート遊びの場面で，Edward は文学上の情熱について打ち明ける．

> Form having already loved verse passionately, I went on to read it continually ; then I went rhyming myself. If anything on earth ruins a man for useful occupation, and for content with reasonable success in a profession or trade, it is the habit of writing verses on emotional subjects, which had much better be left to die from want of nourishment.' (III-2)

建築家で，しかも詩に対する情熱を抱いているにも拘わらず，外的状況が詩作を許してくれない嘆きを吐露するところなど，Edward にハーディ青年自身の姿が投影されているのは明らかである．Edward は理想主義者で社会の現実の姿に深い失望の気持ちを抱いている．Edward は Cytherea の美しさに負けて衝動的にボートの中で接吻をしてしまう．だが，

> 'I have kept something from you, which has now become the cause of a great uneasiness. I had no right —— to love you ; but I did it. Something forbade ——'
>
> 'What?' she exclaimed.
>
> 'Something forbade me —— till the kiss —— yes, till the kiss came ; and now nothing shall forbid it ! (III-2)

と訳の分からないことを告白して，ロンドンに去ってしまう．ここでも，Miss Bradleigh が若き Graye から去る時と同様に，'something'という謎が残される．だが，後に分かることだが，彼は故郷カリフォード村に Adelaide Hinton という婚約者がいるにも拘わらず，Cytherea の魅力に屈し，接吻をしてしまったのである．この時，そのような事情も分からず，Edward の意味不明の言葉を聞いて別れた Cytherea は，当然，大きな失望と怒りの気持ちを抱いた．

一方，Cytherea は生活が益々経済的に逼迫してきたので，今まで家庭教師の求職広告を新聞に出していたが，手応えもないため，求職希望を小間使い（lady's maid）にまで資格を下

げた．これに反応を示したのがMiss Aldclyffeであった．Cytherea は面接に指定のホテルへ出掛け，Miss Aldclyffe と会った．彼女は顔に厳しさを漂わせる45，6歳の女性で，Cytherea の今後に大きな影響を及ぼすことを暗示する強烈な印象をもってここに登場するのである．光輝く午後の直射日光が部屋の深紅の窓カーテンを通り，深紅の壁紙やジュータンに反射し，Miss Aldclyffe の姿を赤く際だたせる．「この見知らぬ人は――青みがかった薄暗がりから出て来たばかりで，更にほやほやの空想に駆り立てられた乙女の目には――焔の中に突っ立っている背の高い黒い人影のように映じた」(IV-2)．Cytherea の眼の底にまだ残像として残っている青みがかった背景に，真っ赤な焔を吹き上げるような黒い姿は，あたかも悪魔が出現したかのような強い印象を与えたに違いない．これは正に，Cytherea の今後の運命を翻弄すべく出現した Miss Aldclyffe の悪魔的本性を示して充分なものである．実際，Cytherea が採用され，ナップウォーター館（Knapwater House）に彼女を運ぶ御者の話でも，Miss Aldclyffe は「悪魔のような傲慢な気性の持ち主」(V-1) であり，しかも短気で我儘で，気持ちが非常に変わり易い．また天の邪鬼的な性格が強く，他人のすることなすこと何にでも反対する傾向があると暴露される．このように典型的な暴君のような Miss Aldclyffe ではあったが，Cytherea が断られ悄然として立ち去った時，彼女の得意とする歩き方に物を言わせた，哀れを誘う後ろ姿に心を強く動かされ，慌てて呼び返し採用することに決めたのである．

Cytherea はナップウォーター館に着く途中，灰色の破風の建物である旧領主邸の前を通り，御者に滝と揚水車のエンジンの異様な音に注意を促される．この音は，物語全体を覆う異常な事件の前兆を示している．これから，灰色の砂岩で整然と頑丈に建てられた18世紀後期の古典主義的建物である，この館に君臨する Miss Aldclyffe を頂点とし，スリー・トランターズ・インを経営する農夫 Springrove や村人の世界が描かれていくのである．これはハーディが熟知するドーセットの片田舎のもので，農村社会の複雑な階層がリアルに描かれており，*The Woodlanders* や *Tess of the D'Urbervilles* などに描かれている農村の世界の原型ともいうべきものである．

ナップウォーター館に入った Cytherea にとって最初の大きな発見は，Miss Aldclyffe のロケットに入っている肖像を見せられ，それが父のものであると分かったことである．父の恋人である謎の女性の正体がはっきりし，今まで「想像の世界でのみ見てきた過去のロマンティックな，隠れた層が，具体的な形になって，ここに姿を現した」(V-3) のを知り驚愕するのである．しかし父の恋人の正体は判明したが，何故別れたのかは依然として謎のままである．

ハーディはこの場面のすぐ後で，当時としては相当大胆な性的雰囲気を醸し出す行為を描いている．Miss Aldclyffe と言い争ってから，Cytherea は自室に入り寝る前に衣服を脱ぎながら，「鏡に映る自分の見事な顔と胸の姿態をちらっと見て，その自然のままの魅力に注意を払った」(VI-1) のである．更に深夜2時まで，Miss Aldclyffe についての様々な想念に捕ら

われ眠られずにいた．そこへこの横暴な女主人が入って来て，2人でベッドに入ると，彼女の身体に両手を回し，優しく自分の胸に抱きしめた．Cytherea がこのような相手の態度の変化に当惑していると，Miss Aldclyffe は突然接吻してくれと言う．

'Come, kiss me,' repeated Miss Aldclyffe.

Cytherea gave her a very small one, as soft in touch and in sound as the bursting of a bubble.

'More earnestly than that —— come.'

She gave another, a little but not much more expressively.

'I don't deserve a more feeling one, I suppose,' said Miss Aldclyffe, with an emphasis of sad bitterness in her tone. (VI-1)

これは，例え年上の女性が年下の女性に親愛の情を示しているだけで他意はないのだと説明する者があっても，レスビアン的行為に相違なく性的なイメージを読者に与えるものであろう．ハーディの小説における，性的描写や，登場人物のレスビアン的属性や行為は，当時のヴィクトリア朝的道徳観にとっては許されざるべきものであったが，この作品に既に穏健な形とはいえその姿を現していることは注目に値しよう．

Miss Aldclyffe は Cytherea に，彼女に対する自分の愛を認めさせ，また自分も Cytherea に心を開くと，すぐに恋人がいるか執拗に探り出す行為に出たが，彼女はその名を口にしなかった．だが翌朝 Miss Aldclyffe はその恋人の名前を Edward Springrove だと当て，彼には別に婚約者がいるのだと言い，Cytherea をひどく落胆させた．

父の急死の後，Miss Aldclyffe は財産管理のために地所管理人を募集する．その公募をロンドンの弁護士に依頼する．弁護士が有能な候補者を推薦するがどれも気に入らず，色々画策し，強引に Aeneas Manston という男を選んでしまう．この奇妙な採用方法で，Miss Aldclyffe と Manston の間にはどんな関係があるのか，何故独身を条件に彼を選んだのか不可解なミステリーが新たに生じる．Manston が新しい土地管理人として着任し，旧領主邸に移り住んでから3，4日後，Miss Aldclyffe は Cytherea に近所の寄付を集めに行くことを依頼する．Adelaide Hinton の家に寄った時，思いもかけず彼女が Edward の婚約者であることが分かりショックを受ける．その上スリー・トランターズ亭で Edward の父 Springrove からも，Adelaide と彼が以前から婚約をしているという話を問わず語りに聞かされて，重く，暗い気持ちになる．その重い気持ちを引きずって旧領主邸に住む Manston のところへ行くが，その時嵐が刻々と接近しつつあった．途中，前方から滝の落下音，叢林の中からエンジンの軋む音が聞こえていた．不吉な前兆であるこれらの音に招かれ，Cytherea は邸に到着した．邸の建物

は異様な青白さを帯びながら，暗い葉の茂みと空とを背景にして聳えていた．謎めいた男Manstonの登場の仕方も印象的である．

On the flight of steps, which descended from a terrace in front to the level of the park, stood a man. He appeared, partly from the relief the position gave to his figure, and partly from fact, to be of towering height. He was dark in outline, and was looking at the sky, with his hands behind him. (VIII-4)

Manstonは，紅蓮の焔を背景に黒い姿を見せて登場したMiss Aldclyffeと重ね合う印象を与え，2人が同じ悪魔的性格の持ち主であることが暗示されている．

Cytherea を見たManstonは驚きと賞賛の色を禁じ得なかった．Manstonは非常に美男子で年齢は30に2，3歳不足していると思われた．顔の表情から見るに彼は「癪にさわるとすぐ反抗する性質の人」で，自分に課せられた運命に甘んじる人ではないし，神意に反抗する報復的決意に燃えて敢然と運命に逆らう人と思われた．また「唇は驚くほど厚く，官能的で，女性のような柔らかい曲線を描き，そのルビーのような深紅色は非常に強烈で，何か女性美に関わる場合に，極めて感受性の強いことを証明するもの」(VIII-4)という容貌は，Tessの人生を破滅させてしまった肉感的なAlecの，女性の外貌や魅力に捕らわれると思慮分別を失い，社会規範をも容易に乗り越えてしまう性格と同じである．即ち，欲情を制御し難く，公正でない神意に反逆心を抱く人物であると予想させるのに充分である．

Edwardに婚約者がいたというショックから完全に立ち直っていないうちに，官能的で，男性としての本能がむき出しにされたようなManstonと衣服が触れ合うとぞっと身震いがした．

His clothes are something exterior to every man ; but to a woman her dress is part of her body. Its motions are all present to her intelligence if not to her eyes ; no man knows how his coat-tails swing. By the slightest hyperbole it may be said that her dress has sensation. Crease but the very Ultima Thule of fringe or flounce, and it hurts her as much as pinching her. Delicate antennae, or feelers, bristle on every outlying frill. Go to the uppermost : she is there : tread on the lowest : the fair creature is there almost before you.

Thus the touch of clothes, which was nothing to Manston, sent a thrill through Cytherea, seeing, moreover, that he was of the nature of a mysterious stranger. (VIII-4)

作者はこのように述べてはいるが，こういうことはあるにしても，女性一般が四六時中衣服に感覚作用があると感じている訳ではなかろう．だが，今の Cytherea は，Edward が別の女性と婚約しているということ，肉感的美男子 Manston との間の異様な雰囲気，外の稲妻を伴う激しい雷雨などで神経が過敏になった結果，この「女性の特性」が顕著になっているのである．Cytherea の神経に，外の雷鳴と部屋の中のオルガンの激しい音の反響が相乗効果を起こして働きかける．「新しい音楽の旋律は新しい衝動的な想いをもたらし，彼女の内部に突き入って身体を震えさせた」のである．そして Cytherea は変化に富んだ調べに魅せられ，感動し，Manston の魅力に心を動かされ，呪文で縛られたように自制心を失い，一種の催眠状態に陥ってしまう．余りの感動に我を忘れ，「いつの間にか彼の傍らに小さくなってうずくまり，口を開けて彼の顔を見上げているのであった」．まるで「魔法にかかったように」その男の虜になってしまう．深く感動した彼女の表情豊かな顔は，「包み隠そうとする女性本来の本能が，見せたいとする今の彼女の強い衝動に，その統御力も全くきかないような状態におかれていた」（VIII-4）ことをはっきりと示していた．自覚することなく官能的魅力を備え，またその自分の官能的魅力に，無意識に無抵抗に翻弄されてしまう Tess と同じ体質がここにも現れている．Tess は自分に備わった官能性のために苦悩し，苦悩しながらも，それによって本能的生命力を燃焼させ，人生を全うさせているが，Cytherea の場合，それは断片的特性に過ぎなく，生命の欲求と行動へ進展することなく終わっている．Manston の彼女に対する影響力は一時的なもので，楽器を弾き終わると同時に消滅し，Cytherea は彼に背を向けて，館に帰って行く．「あの方があんなに私を魅了してしまったのは，どういうことなのだろう」と振り返って思う．Cytherea は冷静になると，ひととき彼女を魅了したことに自信を得た Manston が，忽ち楽譜を渡すという口実の下に，彼女と会う口約束を得てしまったことに，激しい後悔の念に駆られ，断わりの手紙を書くのである．後に，この手紙は Miss Aldclyffe が Edward に意図的に見せ，彼を絶望させて Cytherea を断念させるのに利用される．このような状況によってもたらされた Cytherea の衝動的な反応が事態を決定する重要な要因になって行く．

Manston は Cytherea に一目惚れして接近を試みるが，何故かその気持ちを抑えているような様子である．村人はこれまで Miss Aldclyffe と Manston が結婚するのではないかと思っていたが，今度は Manston が Cytherea に恋をしていると噂する．Manston が仲々求婚しないのは，昔 Miss Aldclyffe との間に何か後ろ暗い陰謀があり，それで彼女の嫉妬を恐れているためではないかと言う．独身を装っているが，実は Manston には，今では嫌気が差していて，ロンドンに別居中である Eunice という妻がいる．その妻が Manston の居所を突き止め，訪ねて来て一泊する．明けて翌日（11月20日）に，Manston の妻と名乗る女性から，Miss Aldclyffe は手紙を受け取る．それには，あなたの力で夫と一緒に暮らさせて欲しい，さもないとあなたの若い頃の秘密をばらすと書いてあった．Miss Aldclyffe に説得されて Manston

は妻 Eunice に次の月曜日（11月28日）にこちらに来るように知らせた．Manston は駅に出迎える時刻を単純な勘違いで間違えて，Eunice と会えなかった．妻は約束の時間に待っていない Manston に腹を立てて，駅のポーターと旧領主邸に行くが，鍵が掛かっており，仕方がなしにスリー・トランターズ亭に行って宿泊することにした．

その晩，Springrove の過失でスリー・トランターズ亭は全焼してしまう．この場面ではこの物語の中でも最も重大な転機になる異常な事件が連続発生する．旅亭のそばの地所に枯れ草が火を付けられて，3日間くすぶり燃えていたが，折からの気まぐれで反逆的な突風のため，枯れ草が大きく燃え上がり，旅亭や周辺家屋を焼き尽くしてしまった．ハーディの小説技法の特徴の1つである自然律の冷酷で恣意的作用の実例がここに十分に示されている．火災の経緯は5分単位で微細に語られている．15分，20分，25分，30分と刻々の時と共にくすぶっていた煙は赤い焔となり，遂にはスリー・トランターズ亭を深紅の焔で包み，向かいの教会を黒々とした夜空にくっきりと浮かび出させ，その中を泣き叫び，傷だらけになって走り回る人々の光景を現出させたのである．視覚に強く訴え，「自然の気まぐれ」（whim of Nature）（X-2）を読者に深く印象付けている．これはハーディの映画的小説技法の効果的な例の1つである．

この火事は何人もの人物に大きな影響を与えて行く．Springrove は猛火の中からやっと救出されるが，宿泊中の Manston 夫人 Eunice の姿が見えず，翌朝遺品として，時計，鍵束，黒焦げの2本の骨が焼け跡から発見される．検死法廷で Eunice は焼死したものと評決され，Manston は自由の身になったと世間から見られる．一方，外的状況が変わったのに伴って，次の日 Miss Aldclyffe に会いに来た Manston は，今までと全く違った態度を取る．Miss Aldclyffe もそれに気付き，「彼の態度に何か変わった所が見られたため，彼女は今までのような語調で話すのを遠慮」する．「彼は今までとは全く違っていた」のである．Manston は Eunice から Miss Aldclyffe の秘密を知り，自分が Cytherea と結婚できるように取り計ってくれと要求する．彼の「僕の恋はあなたの問題にしてもらわなければなりません」（XI-1）という高圧的態度から，Miss Aldclyffe は自分の秘密が知られたことを悟る．その後彼女は急に折れて，館に Manston を呼び寄せ，Cytherea と結婚できるよう策略をめぐらせてやったのも自分なのだから，いくらでも協力すると約束する．そこで火災保険に入っていなかった Springrove に建物の再建をするように迫り，もし出来なければ Edward が Cytherea との結婚を諦め，従妹の Adelaide Hinton と結婚するように説得することにした．Edward は経済的苦境に立たされ，Adelaide との結婚という形でしかその苦境を乗り越えられない状況に追いつめられた．そして，年老いた父のために，婚約者 Adelaide との結婚を決め，Cytherea を断念する手紙を書くのである．

こうして貧困という経済的条件や階級という社会的条件が外の力として Edward を圧迫するが，Miss Aldclyffe が高慢な態度で彼に Adelaide との結婚を迫る時，敢然として自らの内

面的世界の価値観によって対抗している．彼は「赤の他人であるあなたが，グレイさん，ヒントンさん，及び僕以外の誰にも全く関係のない，しかも極めて微妙な問題について，自ら進んで，意見や希望を述べる権利はお持ちになっていない筈です」と昂然と言い放つのである．Miss Aldclyffe は身分の低い自分の小作人の息子が，このように「教育を身につけ，個性を自覚するようになり，ボヘミアン風の自由奔放な見地に立って社会を見つめるようになったこと」(XI-4) に驚嘆する．Edward は自分が身を置く外的世界の義務と，内面的自我の情念とに板挟みになり苦悩する．これは，ハーディの詩人として立とうとする芸術家としての内面的要求を満たしたいという希望と，世間的成功を果たさなければならないという外的圧力の背反する現実に苦しむ姿であり，Edward の中にそれを描いているのである．

Edward は経済的に追いつめられた．そして，先の Cytherea の Manston 宛の手紙を，Miss Aldclyffe によって Cytherea は Manston を愛しているとの偽りの証拠に仕立て上げられて，罠に掛けられた結果，経済問題と愛情問題という二重の苦境に陥り，遂に Cytherea を諦め，別れの手紙を残して姿を消す．

Manston と Cytherea が結婚するのに障害となるものが全て取り去られた後，Miss Aldclyffe はこの結婚話を進めるが，Cytherea は承知しない．Manston も喪に服しているかのように Cytherea に対する気持ちを暫く抑えていた．だが Miss Aldclyffe のこのような力添えもあり，一転して積極的に求愛するが，Cytherea は断固として拒否する．一方，以前からおかしな兆候を見せていた Owen の左脚の膝と踝との間の異常な痛みが，病名不明のまま悪化する．Edward には見捨てられ，兄 Owen の脚の病気は悪化の一途をたどる．そのままでは，Cytherea が Owen を教区の病院に入れて見殺しにせざるを得ない状況に立たされた時，Manston は Cytherea に甘い言葉を囁き，兄への援助の手を差し伸べる．ここで，Cytherea は正に Angel Clare に捨てられ，家を失って路頭に迷う母親と弟妹たちのために，Alec に身を任せる Tess と同じ状況に立たされている．Cytherea＝Tess，Edward＝Angel，Manston＝Alec という構図が浮かび上がるが，この時代の作者の人物描写に奥行きがなく，深い感動を伴う悲劇になっていない．だが，Cytherea の苦悩は Tess に劣るものではない．

Cytherea にあるのは，理性的に考えて，経済的安楽の道である Manston との結婚を選び，Owen を恵まれた手厚い看護のもとで回復させるか，または望みのない Edward への感情に動かされて，Manston を拒絶し，兄妹揃って貧困のどん底に落ち，Owen を教区病院で死なせてしまうかの２つに１つの選択であった．Edward に婚約者がいるという事実，昔の恋人の娘である Cytherea と，私生児の息子 Manston とを，自分の実らなかった過去の恋の代償として，結婚させようとする Miss Aldclyffe の画策，Manston 自身の彼女に対する執拗な愛．これらの困難な状況を使って，ハーディは Cytherea を窮地に追いつめ，嫌っている Manston との結婚に駆り立てて行く．「私たちの外的生活と内的生活の両方を全て満足できるように調和

させることはむつかしいわ」(XIII-4)とCytherea はOwen に言う．個人の自由を強制的に規制したり，個人にとって不本意なことを課したりする外の価値観と自らの信念を以て生きようとする内なる自我の相剋と葛藤は激しい．Cytherea の心中では社会の常識に従うか，自己の感情に忠実に生きるかの問題が競い合っている．

Cytherea が結婚を承諾する動機は，結局経済的社会的なものとならざるを得ない．如何に知的で教養があり，洗練されている Cytherea であろうとも，両親や力になってくれる親戚もおらず，個人的利点を社会に生かし最大限に発揮するための後ろ盾がない現状では，脚に重い病気を持っている兄を抱え，社会的，経済的に全く無力である．そこへ，Owen の病気の治療の面倒を見ようと言いながら，求婚する Manston の援助の申し出は，自らが助けてもらう立場の Owen にも効果的に作用し，妹を結婚するよう説得させることになる．この申し出は，兄の病気に心を痛めている Cytherea の心の中で，形を変え心情と常識の対立，「魂の命令と理性の命令」の間の板挟みとなり，彼女を悩ませる．だが結局 Cytherea は，「英雄的自己犠牲」(XII-7)の道を選ぶ．結婚の承諾は Cytherea の「常識の命ずるところ」の勝利，「理性の命令」(XIII-1) の勝利として描かれるのである．承諾をした後 Cytherea は結婚について考える．

> 'Why do I marry him?' she said to herself. 'Because Owen, dear Owen my brother, wishes me to marry him. Because Mr Manston is, and has been, uniformly kind to Owen, and to me. "Act in obedience to the dictates of common sense," Owen said, "and dread the sharp sting of poverty. How many thousands of women like you marry every year for the same reason, to secure a home, and mere ordinary, material comforts, which after all go far to make life endurable, even if not supremely happy". (XIII-1)

妹の結婚の幸福を願わなければならない兄の言葉としては，突き放したような冷たい言葉である．未だ20歳にも満たない若い男である Owen の言葉とも思えない．これは Cytherea をこのような状況に追いつめたハーディの言葉であろう．この引用文でも作者と Cytherea との距離は十分に保たれている．Cytherea という個人とその未来が，ここでは普通の女性とその運命に一般化されて見られており，その一般化に作者の人生観が現れているのである．ハーディの根本的な考えには，ペシミスティックな人間観，結婚観が大きく横たわっているのである．その反映として，兄である Owen の冷たい言葉は彼の性格から生ずるのではなく，作者の人間の見方から生ずるのであると言えよう．

Manston の求婚の場面は，表面上正反対に見えても，雷雨の日に 2 人が会った場面と基本的には同じである．湿地の川の側で Manston と会った Cytherea の心情に，その背景の自然が微妙な変化を与える．「重苦しいばかりの静寂にふさぎ込んだ彼女はただ黙従的態度を取るばか

り」で，「この湿っぽい場所で彼女の望むことと言えば，ただじっと動かずに立っているだけ」(XII-6) である．この静的場面で Manston は求婚する．

He came so close that their clothes touched. 'Will you try to love me? Do try to love me ! ' he said, in a whisper, taking her hand. He had never taken it before. She could feel his hand trembling exceedingly as it held hers in its clasp.

Considering his kindness to her brother, his love for herself, and Edward's fickleness, ought she to forbid him to do this? How truly pitiful it was to feel his hand tremble so — all for her ! Should she withdraw her hand? She would think whether she would. Thinking, and hesitating, she looked as far as the autumnal haze on the marshy ground would allow her to see distinctly. There was the fragment of a hedge — all that remained of a 'wet old garden' — standing in the middle of the mead, without a definite beginning or ending, purposeless and valueless. It was overgrown, and choked with mandrakes, and she could almost fancy she heard their shrieks……Should she withdraw her hand? No, she could not withdraw it now ; it was too late, the act would not imply refusal. She felt as one in a boat without oars, drifting with closed eyes down a river — she knew not whither. (XII-6)

雷雨の場面は動的で，稲妻の光と雷の音を背景に，Manston の弾く激しいオルガンの旋律が Cytherea を魅了し，彼女の性格の分裂した複雑さが鮮烈に浮かび上がった．一方この沼地の場面は，静的で，辺りを静寂が包み，風景は単調で，西の地平線に浮かぶ秋の夕陽に照らされた茜色の靄に一面に覆われていた．Cytherea はこの静かな雰囲気の中に身を置き，Manston が 2 人の衣服が触れ合う程近づいて来て求愛の言葉を発した時，意識と下意識に分裂した自我を覗かせ，肉体と魂の遊離が起こった状態になる．求婚を断るのに'too late'の状況になってしまったのは，極く短い間の Cytherea のこのような無意識状態のためであった．Manston を一旦許した Cytherea は，受動的で消極的性格のままに，流れに身を任せ漂って行くのである．ハーディの登場人物の性格は，'plot'を導くための論理的必然性を持ち，外的世界に影響を受けないという程「強固な意志」ではない．言い換えれば，それ程単純なものではなく，状況と密接に関わり合ったずっと複雑なものである．心の内部の下意識の世界に得体の知れない衝動や，何かに触発されると瞬時に噴出するかも知れない溶岩のような情念を抱え込んでいる，捉え難い実体なのである．

第13章は結婚式当日である．その前後 Cytherea は「その人の面前にいると遂魅せられて無意識の内に振る舞い，いないところではその人に恐怖心さえ抱くような男性」(XIII-1) のこ

とを考えていた．ここには，意識の上では Manston の外見に魅せられて，その本性が見えないが，下意識では彼の本質を見抜いている Cytherea がいる．兄に説得されて「常識」ある結婚に踏み切ろうと思っていても，Manston の人間性に対する不信感，Edward への断ちがたい愛情，経済的理由で強要された結婚などの思いが下意識で渦を巻いて流れ，彼女の気持ちに不安を与えていたのであろう．更にその晩はひどい嵐で，館の壁の外で鈍い音が聞こえ，その物音は段々大きくなり，誰かが彼女の窓の下の壁を，一束のしなやかな細枝で叩いているようであった．Miss Aldclyffe の父が死亡した夜半の異常な音を思い出し，自分は騒音に運命付けられていると考える．この音が Cytherea の下意識にある Manston に対する不信感に作用し，その不信感を意識の上に上らせる．彼女は浅い眠りのうちに夢を見る．

> …dreamt that she was being whipped with dry bones suspended on strings, which rattled at every blow like those of a malefactor on a gibbet; that she shifted and shrank and avoided every blow, and they fell then upon the wall to which she was tied. She could not see the face of the executioner for his mask, but his form was like Manston's. (XIII-1)

彼女は正に，自分の過酷な運命に，冷たい世間に，Miss Aldclyffe と Manston の欲望に鞭打たれているのである．Cytherea は Tess や Sue のように理性と本能との闘いに苦悩し，自虐的罪悪感に苛まれた女主人公の前身である．

午前中の悪天候を見ると，間違って結婚式を金曜日にしたことを考え併せて，ひょっとするとこれは結婚を取り止めさせようとする the great Mother の計らいではないかと思う．

事象の表面上では天候はやがて収まり，結婚式は行われ，結婚の登録がされる．だがその表面下では少しずつ変化が起こっていた．午前中の台所では集まった人々が，Edward の婚約者 Adelaide Hinton が昨日別の金持ちの男性と結婚したとの噂をしていた．そのことを Cytherea は知らされないが，登録終了後教会で Edward の姿を見た．彼を一旦見ただけで，彼女の心の傷は忽ち癒えてしまう．「一目見ただけで情熱が再燃するという奇妙な現象は男性より女性の場合によくあること」とハーディは，Cytherea の情熱の再燃を一旦はアフォリズム的に説明しているが，実際には「再燃よりむしろ新しく創造されたもの」(XIII-3) であったと言う．Cytherea は目覚め，「家の都合のために結婚するなんて ― 何て馬鹿げたことだろうか！」という考えに至る．この時彼女の「道徳性」「社会的因習」「分別」などは消滅し，Edward Springrove を「全身全霊を傾けて愛している」ことを自覚し，既に彼女の気持ちは「恥も外聞も気にする段階を通り越して」(XIII-4) しまっていたのである．Owen に夫を愛するのは社会の義務だと説教されても，Cytherea は社会は如何に冷酷で無責任であるかと反駁する．下意

識に潜在していた世間の不条理についての反発が，昨夜の夢の中に少し顔を出し，Edward との再会の感動で，はっきりと意識の上に出て来たのである．ここで個人の本質的独立性を強調するのである．

結婚式後，邸の外で Edward は Adelaide が昨日結婚し，今や自分は自由の身となったので，Cytherea の意志をもう1度確かめようとしてやって来たのだが，遅すぎたと打ち明ける．ここでの'too late'という言葉は，Tess と同様な悲痛な叫びではあっても，見かけ上のことであって Tess のような悲劇にはならない．後に，Manston に出した Cytherea の断り状を使って，Edward を Miss Aldclyffe が騙したことも判明する．しかし，どういう事情が判明しても，Cytherea は Manston と既に結婚してしまったという事実は変わらず，2人はパリに向け出発する．C. J. P. Beatty は，この物語は2部に分かれて，第1部は第13章第4節の結婚で終わる．そして，以後 Cytherea は表舞台から姿を消し，男性たちが取って代わり，ウィルキー・コリンズ流の扇情的場面に転ずると述べている[5]．

これからは，これまで積み重ねられた謎解きが始まる．駅で Cytherea を見た赤帽 Chinney は蒼ざめ，不安になって，Raunham 牧師に重大な告白をする．あの Manston 夫人 Eunice が駅に姿を現したというのである．Chinney は火事の晩，スリー・トランターズ亭に Eunice を送って行ったが，あの夜遅く，彼女が駅に戻って来て，汽車の時間を訊ねたと証言する．今まで黙っていたのは彼女に堅く口止めされていたからであると説明する．Eunice は未だ生きている可能性がある．Eunice が生存していれば，Manston は重婚ということになる．Edward と Owen は相次いで新婚夫婦の後を追い，まだサウスハンプトンにいた Cytherea をバドマスに連れ戻す．だが，Eunice は一体どうなってしまったのかという謎が新たに生ずる．そこで，再び村に戻って来た Manston は，妻が生存していることになったので，Raunham 牧師の忠告を受け入れ，行方不明の妻の捜索の広告を出す．3度目の広告で，Manston 夫人と称する女性がロンドンからやって来た．2人は一緒に暮らし，世間の憶測に終止符を打った．

だが，疑惑は完全に解明された訳ではない．Edward は，Manston が尋ね人の広告を出す前日に，妻の筆跡で書かれた手紙を受け取っていることを知る．全ては，Cytherea を誘惑するための Manston の悪巧みだと思い，それを立証しようと，証拠を集める．偶々 Manston が妻のことを歌った詩が見つかり，Cytherea がその中の「青い瞳の光」(XVII-3) という文句に気が付き，今 Manston 夫人と名乗っている女性は「眼が闇夜のように漆黒」(XVIII-1) であることを Owen が確認する．Edward がこの女性は Anne Seaway という替え玉であることを Raunham 牧師に証明する．その結果，本物の Manston 夫人の行方が疑惑の焦点となる．Eunice は果たして火事の晩焼死しているのであろうか，もし生きていないとしたら，何故 Manston は替え玉を使ってまで妻が生きているように見せる必要があったのだろうか．Cytherea と結婚したいのなら，Manston にとって，むしろ妻が生きていない方が好都合であ

ろうに.

Eunice に関する疑惑に付随して様々な怪奇な出来事や行動が連続する. この物語は正に不可解な謎の累積で, 得体の知れない「謎の雲」に覆われ, 各々の人物の行動は互いに「秘密の絆」で結び付けられている. ハーディは読者を謎が分からないというサスペンスの状態に置き, その累積が異常な興味を喚起し, そのことが作品を特徴付けている. そして, このサスペンスが, Eunice が死んだのではないかという証言を契機に Manston への疑惑が生じ, 再び現れた妻が本当の Eunice であるかどうかという Edward と Owen の真相究明のスリルに転じて行ったのである.

Edward と Owen が真相を究明すべく活躍し, Raunham 牧師がそれに積極的に荷担するようになると, Manston はいよいよ追い詰められて行く. だが Manston にとって運命の日となる 3 月21日の前日でも, Anne の「ユーニスが生きていると証明されたら, 彼女, きっと姿を現すわ」と言って, Eunice の所在について探りを入れても, 彼は「あの火事で死んでいる」(XVIII-3) と断言する. Anne はその言葉を信じようとしない. 更に21日当日には, Raunham 牧師から, 今 Manston と一緒に暮らしている女は替え玉だと聞かされた Miss Aldclyffe が, Manston を訪ね詰問する. その間, Anne は窓の外で立ち聞きしようとするが, 風や滝の音に邪魔されて肝心なことは何も聞けなかった.

第19章は Manston の犯行暴露の日である 3 月21日の一昼夜の出来事である. 自分が絶望的に追い詰められたことを悟った Manston は, 晩遅くなって Anne に睡眠薬を飲ませ, 最後の行動に移る. しかし, Eunice の手紙を読んで, 既に Manston に充分な疑惑を抱いている Anne は睡眠薬を飲んだ振りをし, 熟睡を装う. Manston は 1 人で逃亡の用意をしているようだ. 真夜中邸を抜け出した Manston の後を, Anne は追う. 離れ家の戸棚で隠されていた壁の部分を剝がし, 竈から重いかさばった袋を引き出して, 背負い庭に出る. おぼろ月の光が彼の輪郭を照らし出す. 袋を背中に背負い, 手には鋤を持っていた. Manston の後を長いマントの男が追い, 更に背が高く, 黒っぽくぴったりと身を包んだ女性が続き, Anne はその最後の女性の後を追う. そうとは知らず, Manston は林間の空き地を横切って, 農地に入り, 滝と揚水車の中間の, 落葉の積もっている窪みを掘り起こして袋を埋める. その時, 黒い衣服の女性の「逃げなさい!」という言葉で逃亡する. 掘り起こされた袋の中には Eunice の死体があった.

Desperate Remedies のミステリー部分に於けるこの最高の山場で, Graye が転落死した時と同じ技法が効果的に用いられている. ハーディは全能者の視点からこの小説を書いているが, 本章では一転して, Anne Seaway の視点に移動している. 彼女は Manston の慌ただしい様子を注意深く監視するのである. ここでハーディの作品世界で重要な機能を持つ「見る」という行為がアイロニカルな効果を充分に発揮しているのである. Manston が, 殺した妻の入った袋を埋めるところを, Anne と, 先程の長いマントの男である Raunham 牧師に雇われた警

官が見守っている場面は，次のように描かれている．

Intentness pervaded everything ; Night herself seemed to have become a watcher.

The four persons proceeded across the glade, and into the park plantation, at equi-distances of about seventy yards. Here the ground, completely overhung by the foliage, was coated with a thick moss which was as soft as velvet beneath their feet. The first watcher, that is, the man walking immediately behind Manston, now fell back, when Manston's housekeeper, knowing the ground pretty well, dived circuitously among the trees and got directly behind the steward, who, encumbered with his load, had proceeded but slowly. The other woman seemed now to be about opposite to Anne, or a little in advance, but on Manston's other hand. (XIX-6)

Anne はこの場面の前に，他の 3 人の人物とその行為を全て見ることの出来る立場にいた．Manston の不可解な行為も，それを密かに監視する警官の姿も見ているし，もう 1 人の黒い姿の女性の正体が Miss Aldclyffe であることもここで知るのである．読者はこの場面において，これらの人物たちを取り巻く背景と共に，彼らの位置が細かく記された見取り図を示されている．そして彼らが構成する光景を全て眺めているのが，「夜」という監視人である．Manston を 3 人の人物が監視している．彼らも見る人でありかつ見られる人となる．その中でも Anne は他の 3 人の行動を見ている．更にその上に「夜」という超自然的な観察者が存在するのである．Manston の恐ろしい犯罪行為は，直接的に読者に示される．Anne の眼で濾過され，抽象化された Manston の行為は，「夜」という超自然的，抽象的な観察者によって見守られている世界の一構成要素に変化する．このように読者は最初 Anne と同じ位置にいるが，やがて「夜」と同じ視点を共有することになる．そして複雑な視覚装置を通って見られている光景の描写の下で，Manston の鬼気迫る犯罪行為とそれを見守る人々の真剣な観察には，恐怖と神秘の感覚と同時に，人間存在の愚かで，悲喜劇的姿の皮肉な印象が生じ，愚劣な行為をしでかす人間という存在に対する強烈なアイロニーが漂うのである．

ハーディの聴覚，視覚，触覚など五感に訴える描写はスリラーの場面にも大きな効果を与える．Manston 逃亡の直ぐ後，警官は Manston の埋めた死体の袋を闇の中で掘り出した．

The string which bound the mouth of the sack was now cut. The officer laid the bag on its side, seized it by the bottom, and jerked forth the contents. A large package was disclosed, carefully wrapped up in impervious tarpaulin, also well tied. He was on the point of pulling open the folds at one end, when a light-coloured thread of something,

hanging on the outside, arrested his eye. He put his hand upon it; it fell stringy, and adhered to his fingers. 'Hold the light close,' he said.

She held it close. He raised his hand to the glass, and they both peered at an almost intangible filament he held between his finger and thumb. It was a long hair; the hair of a woman. (XIX-6)

真夜中の森の中，一条の明かりにぼんやりと照らされ，ねっとりと指に絡み付いて浮き出た女の長い髪の毛，正に身の毛もよだつ恐怖の光景が眼の前に現出するのである．恐怖の悪寒が読者の背筋を走るであろう．Manston はそれ以前に，Eunice が火事で焼死したと見せ掛けるよう偽装工作をする時，1度隠した死体を再び取り出し，時計と鍵束を取って，壁の中に再び埋め直したり，頭蓋骨を求めて墓地をさまよったりする．この凄惨な Manston の姿は読者を戦慄させずにはおかない．上掲引用の場面は物語全体でもスリラー部分でも圧巻と言えよう．

この2日後 Manston は逮捕され，1週間後に州刑務所内で首吊り自殺をする．その後程なく Miss Aldclyffe も病の床で死ぬ．2人は死の間際に自分の過去を告白する．Manston は遺書を認めて，Miss Aldclyffe は遺言として口頭で．彼女は30年以上前に，将校の従兄に裏切られ私生児を生んだ．その子が Aeneas Manston であり，生まれるとすぐに捨てたが，その成長を陰ながら見守っていた．その後，Cytherea の父 Ambrose Graye と知り合い，初めて精神的に真に愛されることの尊さを知ったのである．だが，この過去の秘密のために，Graye と結婚できなかった．そして，やっと物語の最後の場面になって，冒頭の挿話中の'…something divided us eternally.'の something とは，物語の始まる前段階で起こった，Miss Aldclyffe が私生児を生んだという事件であることが，Miss Aldclyffe 本人の口から明らかにされるのである．そして，我が子 Manston を自分の真の恋人 Graye の娘 Cytherea の夫にするのが楽しい夢であったと切々と述べて，死んで行く．*Desperate Remedies* は Miss Aldclyffe のこの過去の事件を核にして展開されて来たのである．ここで，Miss Aldclyffe が Graye と会ったのも，'it was too late'と述べられているが，前述の Cytherea が Manston の求婚を断わろうとする場面や，Edward が Cytherea の結婚後駆けつけた時の'too late'よりも，ずっと *Tess* の主題の'too late'の悲惨さに近い．また Manston が Cytherea と知り合ったのも，既に Eunice と結婚していたので，Cytherea と結婚するには'too late'であったのが，Providence に反して彼女と結婚してしまったことに悲劇が起こったのである．

Manston は明らかに，Miss Aldclyffe の2つの悲恋（従兄との恋愛と Graye との恋愛）の犠牲者である．私生児として生まれ，母に捨てられ，母の手許に置かれると，叶わぬ恋に苦しみ，その恋を実らせようとして誤って妻 Eunice を殺してしまい，最後には自らの命を断たなければならなかった．悲劇は生まれた時から約束されていたのである．Manston の棺が死者に

威厳を与えているのを見て，悲劇的事件は必然の働きの結果であることを暗示している．

…we say sudden death, don't we? But there's no difference in their nature between sudden death and death of any other sort. There's no such thing as a random snapping off of what was laid down to last longer. We only suddenly light upon an end thoughtfully formed as any other — which has been existing at that very same point from the beginning, though unseen by us to be so soon. (XXI-1)

Manston は遺書の中で厭世観を吐露している．「人間の一生というものは，邪悪に考案された仕組みであることが分かったので，ぼくはそれに見切りをつける」という言葉で始まっている．火災の夜「嫌悪の念を抱いていた女性への束縛から解放されたことに対し，先ず神に感謝の念を捧げた後」，すぐに妻が生きているのが分かり，「遂先程，感謝したばかりの神は，ぼくを苦しめ，あざわらっているように思われた．ぼくは発狂したような気持ちになった」(XXI-1)．Eunice に脅され激怒し殺してしまった．そしてその後の顚末を述べ，最後に，

I am now about to enter on my normal condition. For people are almost always in their graves. When we survey the long race of men, it is strange and still more strange to find that they are mainly dead men, who have scarcely ever been otherwise. (XXI-1)

と結んでいる．

この破滅の道を進むきっかけになったのが Cytherea との出会いであった．Cytherea に魅せられた Manston は征服欲に駆られ，種々の奸計を企て，執拗に彼女を追うようになる．その追う姿に悪党の魅力が与えられて行く．だが，妻を殺したことが暴露されかかると，万事を事の成り行きに任せ，殺人をただ繕うだけの小細工を弄するような悪あがきの小悪党に堕してしまう．そして，自分を追う Edward や Owen などの人物の中に埋没してしまう．誇り高く傲慢な Miss Aldclyffe は Cytherea と Manston を自分の意のままに動かしていたが，Manston に過去の秘密を知られると全くその力は衰え，哀れな過去の亡霊の姿となる．Miss Aldclyffe と Manston は一直線上の存在であり，Graye 父子を求めても最終的には結ばれず破局に到る．漸くこの最終段階で，Manston も Cytherea も知らない，それぞれの母と父の不完全燃焼に終わっていた悲恋の物語が完全に燃焼し尽くし完結したのである．また，Graye 兄妹も，過去の悲恋の清算ができず，人生を半分投げ遣りに生きて，借金を作り，不注意な事故で死んでいった父の事後処理を完結し，過去の呪縛から解放されたと言えよう．

物語の最後は，Edward と Cytherea の新婚夫婦が湖上で小舟に乗る場面で終わる．これは

冒頭のバドマス湾の再現である．これもハーディが得意とする反復の技法である．

この小説はハーディの作品らしくないとよく言われるが，これまで検証して来たように，彼の小説作法の萌芽的特徴が数多く現れている，正に彼の作品そのものと言えよう．

注

1) *The Life of Thomas Hardy*, pp.80-81
2) ibid., p.82
3) ibid., p.81
4) *The Wessex Editions, Desperate Remedies*, p.12
5) ibid.

参考書誌

1. *Desperate Remedies, The New Wessex Editions ; The Novels of Thomas Hardy,* ed. by P.N. Furbank, Macmillan, 1975
2. Hardy, Florence Emily, *The Life of Thomas Hardy 1840-1928,* Macmillan, 1983
3. Cecil, David, *Hardy the Novelist*, Constable, 1969
4. Guerard, Albert J., *Thomas Hardy*, New Direction, 1964
5. Gregor, Ian, *The Great Web*, Faber and Faber, 1975
6. Hawkins, Desmond, *Hardy, Novelist and Poet*, David and Charles, 1976
7. Hurst, Alan, *Hardy : An Illustrated Dictionary*, Kaye and Ward, 1980
8. Millgate, Michael, *Thomas Hardy, A Biography*, Oxford University Press, 1979
9. Saxelby, F. Outwin, *A Thomas Hardy Dictionary*, Greenwood Press, 1980
10. Taylor, Richard H., *The Neglected Hardy*, Macmillan, 1982
11. Thurley, Geoffrey, *The Psychology of Hardy's Novels*, University of Queensland Press, 1975
12. 鮎沢乗光「トマス・ハディーの小説の世界」開文社出版，1984
13. 大沢　衛（編）「ハーディ研究」（現代英米作家研究叢書）英宝社，1976
14. 大沢　衛・吉川道夫・藤田　繁（編）「20世紀文学の先駆者トマス・ハーディ」篠崎書林，1978
15. 小田　稔「トマス・ハーディ」篠崎書林，1990
16. 小田　稔（訳）「トマス・ハーディの小説における性格描写と運命形象」学書房，1980
17. 佐野　晃「ハーディ」冬樹社，1981
18. 本田顕彰「ハーディ」（20世紀英米文学案内４）研究社，1969